若越郷土研究
43の4

北野博美の大正時代

――折口信夫への遥けき道程①

内海宏隆

1 はじめに

《北野博美》は福井市乾上町出身、日本民俗学の勃興期から興隆期にかけて主に折口信夫の「裏方のひと」として活躍した速記者・編集者・民俗研究家である。が、その経歴については未詳の点が多い。まとまった伝記的資料としてはほとんど唯一、折口信夫の高弟で《北野》とも親しかった国文学者・高崎正秀による「北野博美年譜その他」（以下「高崎年譜」と略称）があるくらいである。（註1）しかし、「高崎年譜」の叙述は（たぶんに意図的と思われる）伝記的空白（省略？）や（極めて主観的な）修辞的表現、明らかな誤記などを含み込み、全体としてさまざまな解釈の可能性を内包した重層構造のテクストを形成している。筆者の意図はこの客観性や精確さを欠いた「年譜」の言説を能う限り読み解き、裏付けをとることで謎に満ちた《北野博美》の伝記を少しでも明らかなものにすることにある。また、彼の人の足跡を細やかに辿ることで、折口信夫の伝記的資料の充実と折口学成立過程の理解を図ること（延いては日本民俗学史の初期を照射すること）を遥かな目標としたいと思っている。尚、本稿は既に発表された拙稿（「裏方のひと―北野博美と折口信夫」『芸術至上主義文芸』第22号（96・12）、「裏方のひと―北野博美伝①～③」『若越郷土研究』第42巻第2～4号（97・3～7））の後を承ける内容のものである。またこの稿の続編としては「北野博美と折口信夫―昭和初期の動向を中心として」『攻玉社中学・高等学校研究紀要』第3号（97・4）「北野博美の晩年―折口信夫とのわかれ」『芸術至上主義文芸』第23号（97・12）云々。

《北野》の足跡、特に前半生のそれを辿ることの難しさは前述した如くである。（註2）第一の問題もまだ片付いていないのに次なる問題に手を染めることは、いたずらに火種を撒き散らして・全体を混乱させる原因となるかもしれない。しかし筆者は立ち止まることよりも、とりあえず歩を進める方を選ぶ。なぜならこの先、なんらかのきっかけで活路を見いだせるかもしれないからだ。先学諸賢よりのご教示を切に願う次第である。

2 謎多き「旅役者」時代【～大正六年】

「高崎年譜」より明治の末から大正時代にかけての記事と思われる第三～五項を再掲する。

一、従兄滝沢豊（朝日新聞福井支局長）により、一四、五歳より新聞記者生活に入り、

一、のちしばらく旅役者の群に投じ、どさ廻り。たまたま一夜甲府市に一座興行、市の富家の令嬢と相愛す。長女巴児・長男晃・二女照日の三児をあげてのち別居。云々。
一、大正一一年九月、国学院大学に折口信夫の万葉集講座開講され、翌年一〇月、源氏物語全講会開催されるや、常に夫人同伴聴講。折口学に傾倒し、終生違わず。

まず問題点の第一は、第四項の一連の出来事が新聞記者生活をどれくらい続けた「のち」の出来事なのかということである。またどういうきっかけで「旅役者の群に投じ」るようなことになったのかも考えて見る必要があろう。第五項が「大正一一年九月」よりのことなので「旅役者」としての履歴はそれ以前のこと（《北野博美》29歳以前のこと）であると類推できる。新聞記者生活のスタートが14～15歳のことだから、十四、五年のブランクがある。あまりに間があきすぎている。《北野》は「旅役者」としてのキャリアに終止符を打った後すぐに国学院の折口の教室に出向いたのか。それもなんだか怪しい気がする。

「高崎年譜」にはいくつか時期の不明な記載事項があるのだが、その中の一つに雑誌「性の研究」刊行がある。東京大学明治新聞雑誌文庫には「性之研究」（大正8・12・15創刊号～10・11・20　第3巻7号）が収められている。その内容については後述することになるが、少なくともここで明らかにしておきたいことは《北野》が大正8年（26歳）の時点で既に東京で雑誌編集の仕事に拘わっていたということである。また「性之研究」の《雑誌編輯兼發行人》である北野千加なる人物は《北野博美》の妻であった人ということである。また「性之研究」（第1巻第4号大正9・6）「編輯後記」に「これまではいつでも此の期間だけは何もしないでゐたのだが、昨年からそれが許されなくなつた。昨年は『變態心理』の編輯で、今年は此の雑誌と両方で。」という言葉より《北野》がこの雑誌と並行して一時期「變態心理」なる雑誌編集にも携わっていたことが伺える。

そこで慶応義塾大学メディアセンターで雑誌「變態心理」を閲覧させていただいた。《北野》がこの「變態心理」なる雑誌の編集者となったのは大正8年1月からであり、更に溯ること大正7年4月（《北野》25歳のころ）「第一回變態心理學講習會全科目出席者」として「市内小石川區雑司ヶ谷五二　早稲田文學士　北野博美氏」の名前を（『變態心理』2―7）に見つけることができるので、大正7年5月《北野》25歳の段階で「旅役者」としての履歴は既に終わっていたと考えてよいだろう。また「變態心理」第4巻第26号に注目すべき記事を発見した。それは「人間的証券」という欄に掲載された《きたの・ひろみ》作「旅役者の手記」という《創作》である。作品としての出来不出来はこの際問題ではない。多少虚構化されている部分もあろうし、また作品の叙述をそのまま伝記的事実として鵜呑みにしてはならないだろうが、ここから《北野》自身の声と思われる部分を一応抽出してみる必要はあろうと思う。ざっとあらすじを紹介する。

ある夏の日。作中の語り手兼主人公である「私」は旅役者になって半年以上になるが、その日初めて「旅役者」という言葉の響きに

「何んて悲しいもの哀れな」ものを感じる。また「親爺や友達が聞いたら何といふだらう。」とも思う。「生れながらにして旅役者たるべく運命づけられてゐたかのやうな顔をしてゐ」る人達が「連中」には多く、「私」はその中で常々違和感を感じている。「私」には「残して来た故郷」があり、現状を「私は今旅にあるのだ」「家を捨て、友を捨て、職業を捨てゝ」「白紙の夢」の中にあるのだと思い込もうとする。「早く東京へ行きたい」「すぐ東京へ立ちたいと思」い「S」からの送金のおかげで「明日はいよ〳〵此の生活から脱がれられると喜んだ」のもつかの間、「連中」にたかられ散財してしまう。「あゝ、あ、またこんな生活がいつまで續くのだらう」と落胆する。どさ廻りの旅は続く中、「私は此の頃だん〳〵日記をつけなくなつた。それだけ此の生活に馴れて來たのだらうか。」と思ってみたりもする。また「俺はいつになつたら東京へ出られるのだ。」と焦燥感にかられたりもする。初冬の日「親爺」から為替が送られてくるがまんまと騙されて「連中」のひとりFに遣われてしまう。ある日、役者同士の恋のもつれを告げられた「俺」は問題の解決よりも、途方に暮れて「あゝ、俺にも早くほんとに別れる日が来ればいゝ…」と考えるのであった。

小説はここで完結するが、この後「高崎年譜」にあったような劇的な出会いがあり、二人は手に手をとって上京したのかもしれない。ここから先に述べることは下種の勘ぐりに過ぎないことを最初から断っておくが、もしもそんな落ちをこの小説につけてしまったらそれこそ「出来過ぎたお話」になってしまい白けるのは必至だ。そこで事実はそうであっても小説としての面白みを優先して「明日をも知れぬ」不安な状況のままで幕を閉じたのかも知れぬ。また、上京を切望しながらも人のよさにつけこまれて「私」は何度か資金を奪われてしまう。この後もそうしたことが続かなかったとは断言できない。「高崎年譜」のミソはのちに《北野》の夫人となる人が「富家の令嬢」であったと記されているところにある。単に「聞き手」（高崎）を退屈させないための「語り手」《北野》の作り話（逆シンデレラストーリー）ととれないこともないが上京に必要な金策に困っていた「私」を救ったのは案外こうした「富家の令嬢」であったかもしれぬ。事実は小説より奇なりというではないか。

閑話休題。はたして《北野》自身がこの小説の中の登場人物「私」と全く同じ境涯にあったかどうかは確かめるすべもないが、一応この小説を参考資料として考えてみる必要はあろうかと思う。中でも注目すべきは「私」に設定された年齢である。ある日、「静田」という座長の知り合いでジゴロのような男と意気投合し、一晩語り明かし「二人はすつかり十年の知己のやうになつてしま」う。その「静田」の年齢が「二十三」で「俺より一つ上だ」と語られていることから「私」の年齢が二十二歳として設定されていることが分かる。これを一応の目安として考えれば、《北野》が「家を捨て、友を捨て、職業を捨てゝ」上京しようと行動に出たのは少なくとも二十代前半以前ということになろう。

《北野》は本当に「旅役者」をしていたのだろうか。

《北野》から民俗学の指導を受けた新井恒

易氏（大正元年12月18日生まれ　民俗芸能学会名誉会員）は「日本民俗協会と芸能研究」（『民俗芸能研究』第20号　平成3年11月）の中で「彼（筆者注・北野）は青年のころ郷里の福井から俳優を志望して上京したという。俳優にはならなかったが、ともかく文芸界や芸能界にも知人が多かった。」と記している。また筆者の質問に対して「北野が上京中に旅役者群に投じた具体的な行動を、高崎は北野から直接聞いたのだろうか。私は知らない。（中略）北野夫人はだれか。年譜では旅役者の仲間に入り、甲府で土地の富家の娘と結婚、一男二女を生んだというが、どうも伝説みたいで、私は北野から聞いたこともない。とにかく北野をよく知っていたのは西角井正慶と出版社の富永社長だったろうが、すでにこの世にない。」と答えて下さった。

ここで話の順番があべこべになってしまうのだが一つの重大な報告をせねばならなくなった。（というのも《北野博美》にまつわる全ての調査は同時並行的に進行しているので、これ以上前進不可能と思われて見切り発車をした途端、新資料が発見されるなどということがざらにあるのだ。）田中緑紅の主宰する『郷土趣味』という雑誌が京都にあり（管見によれば一時期は「東に《北野》の『性之研究』あれば、西に田中の『郷土趣味』あり」と言った感じだったようだが）その大正十三年一月号の「編輯餘録」に「斎藤昌三氏は北野博美氏と「新性」を出される事になりました。創刊號は大變評判がよく再版迄出たそうです。新事業の成功を祈ります。十三、一、十三　緑紅」なる記事を見つけた。そこで斎藤昌三にアプローチをかけてみたのだがその二著「少雨叟交遊録」（『斎藤昌三著作集』第五巻　八潮書店　昭和56）並びに『36人の好色家』（坂本篤補注　有光書房　昭和48）の中に《北野》に関する重大な記事を発見したのだ。まず「少雨叟交遊録」の中では「北野は大した学歴はなかったが、新劇団で甲府へ興行に行った時夫人を得たので、以来文筆生活に転向した」と記している。（「夫人を得た」「文筆生活に転向した」前者の内容と後者の内容とが《原因》と《帰結》とで括られるのはどうみてもおかしい。）そして後者。

北野博美

雑誌「性之研究」が発刊されたのは大正八年であるから、この種のものとしては先駆の方であろう。休刊したのは大正十年頃か。

この雑誌を創刊したのは北野博美である。彼は明治二十六年、福井市乾上町に生れ、福井の中学を終えて上京した。上京してからの経歴は判らないが、市井の噂では新劇の役者に加つて、旅から旅の興行に従つたともいう。その興行中に結ばれたロマンスが、甲府で知られたH家の令嬢だつたとの説である。兎に角大正五年に結婚して目白の邸宅に収まり、そこで三人の子供を儲け、前記の雑誌の創刊ともなつたのだが、「性」の横山流星も一時は其処の研究室にいた。「キネマ旬報」の田中純一郎君もその一人ではなかったろうか。（註3）（以下傍線筆者）

まだ三分の二ほど本文は残っているのだが、とりあえず引用はここまでとしたい。更に、この本の巻末に坂本篤が付けた補注に驚くべき事実が書かれていた。

（前略）そ（北野）の細君広瀬千香さんは私の母の友人の娘で、昌三と母はよく北野と彼女のロマンスを話していた。後に千香女が、北野と別れて昌三の書物展望社を手伝つたり昌三と親しくなつたことは（筆者注・昌三は）一言も母には喋らなかつた。

「甲府の富家の令嬢」「甲府で知られたH家の令嬢」の名は「広瀬千香」と言ったのである。（註4）「山梨百科事典」（山梨日日新聞社　89）を繙くと「広瀬」姓をもつ著名人が数多く登場する。さすがに「広瀬千香」その人は載っていないが、「甲府の富家」という「高崎年譜」の言葉を《鍵語》にして何人かピックアップしてみた。

広瀬鶴五郎（ひろせつるごろう）一八五九（安政六）・一〇・一―一九二〇（大正九）・六・一七　一八七七（明治一〇）年に父庄左衛門の始めた製糸工場の経営にもあたったが、一八八九（明治二二）年以来、相與村長、郡会議員・県会議員を歴任、県会においては広瀬和育・広瀬久政とともに「三広瀬」と呼ばれた。（中略）製糸業の発展に力を尽くした。

広瀬久政（ひろせひさまさ）一八六五（元治二）・二・一六―一九三九（昭和一四）・九・二八　下於曽村（塩山市）広瀬久光（下於曽村の豪農）の長男。（中略）一八八三（明治一六）年、家督を相続、その後、七里村会議員、東山梨郡会議員を経て、一八九二（明治二五）年、県会議員に当選した。（中略）山梨県における政友会の重鎮として仰がれた。

広瀬和育（ひろせわいく）一八四九（嘉永二）・四・一四―一九二五（大正一四）・四・二九　藤田村（若草町）の生まれ。儒医広瀬平五郎の子、蘭学者広瀬元恭の甥。一八七二（明治五）年以後、戸長、区長を歴任。一八八〇（明治一三）年、同地方製糸業の金融の円滑化を図り、貸付会社釜右社を設立して社長。（中略）のち第十銀行頭取になった。（以下略）

広瀬一族は山梨では確かに名家のようである。しかし一体この中のどの家が「広瀬千香」の実家なのか見当もつかない。（註5）

国会図書館のCD―ROMで念のため「広瀬千香」の検索をしてみると四つの文献が出て来た。

広瀬千香・編　日本書誌學大系15　共古目録抄　青裳堂書店　昭和56・4・25

広瀬千香・著　山中共古ノート　第一集（未発表稿私家版）　青燈社　昭和48・6・16

広瀬千香・著　山中共古ノート　第二集（未発表稿私家版）　青燈社　昭和48・6・16

広瀬千香・著　山中共古ノート　第三集（未発表稿私家版）　青燈社　昭和50・6・16

これらは全て日本民俗学初期の功労者・山中共古についての書誌的・伝記的な研究文献である。「没後から数へれば最早四十五年経つて」おり「山中笑といふ名さへ、埋れかゝ

つたかであるが」同郷であること・信仰（基督教）を同じくしていたこと・一度磬咳に触れたことがあることなどを理由に「朧げながらも、先生の全貌をまとめ得ようか…と、老残の身を駆り立てる決心をした」とその序で語られている。ちなみに折口信夫も「山中先生の学問」と題したオマージュを昭和四年四月『江戸文化』に寄せており、日本民俗学勃興期に貢献した山中共古を高く評価している。「山中共古ノート」第一～三集の中から参考になりそうな言葉を拾ってみた。

（前略）大正大震災の前夜、先生が目白鶉山の私の小宅へお見えになり、その磬咳にふれた…。

『山中共古ノート　第一集』（二ページ）

関東大震災の混乱も漸く落着きを取戻さうとした頃のこと、目白鶉山の北野博美の宅で、月例、輪読会が開かれるようになつた。

（中略）輪読会が始まると、私は遠慮して二階へ行かなかった。

『山中共古ノート　第二集』（七十二ページ）

これらは同じ内容の事柄を別の表現を用いて述べたものである。「私の小宅」と「北野博美の宅」は近隣に存在した別々の家ではなく同一のものなのである。広瀬千香は《北野博美》の最初の妻、北野千加その人であった。（註6）

功刀（亀内）氏（筆者注・山梨の著名な蔵書家）には東大の明治新聞雑誌文庫の応接室で、宮武外骨先生から、アンタと同郷人だよ、と云はれて紹介された。山梨県中巨摩郡豊村出身の氏はその頃古書籍商であつたが、その以前は繭の中買商で、私の生家が生絲繭商だつたので、うちの店へ出入りしてゐた、といふ話をされた。

『山中共古ノート　第一集』（六ページ）

（前略）私もいつか年を重ねて、明治卅年生れ、十九世紀末葉のカビ臭い古物になってゐた。校正が出てモタ〳〵してゐるうちに、一そのこと六月の誕生日を発行日にすることにした。

『山中共古ノート　第三集』（後記）

私は（中略）山梨県立高等女学校へは入って（ママ）からは、周囲が日本基督教会派の山梨教会へ出はいりする事から、錦町のそれへ日曜礼拝には出るやうになり、十四五歳の頃、牧師鷲津貞二郎先生から受洗した（中略）。私が上京する直前のころ、甲府市の中心の桜座といふ芝居小屋（甲府第一の劇場）の裏手に、錦町教会は会堂建設の運びとなった。（中略）会堂の定礎式の日、（中略）その敷地で教会一同の記念撮影をした写真が私の手許に遺ってゐる。大正五年の春先きのことで（後略）

『山中共古ノート　第一集』（八二ページ）

以上のことより推察すると「広瀬千香」は明治三〇年六月一六日山梨県甲府市生まれ。山梨県立高等女学校出身ということになる。また「千香」の上京は大正五年の春頃ということになる。《北野》が興行をうっていた場所はこの教会の表に位置した「桜座」という劇場だったのではあるまいか。大正五年《北野博美》23歳、千加19歳のことと想像される。「昌三と母はよく北野と彼女のロマンスを話していた。」という坂本篤の言葉もこの話の裏をとる材料となりそうだ。

「高崎年譜」の第四項記述の「確からし

さ」もだんだん増してきたようだ。しかし問題点の第一「新聞記者生活をどれくらい続けた『のち』の出来事なのか」については未だ不明としか答えようがないが「二十代最初まで」というのが一つの目安となろう。また「どういうきっかけで『旅役者の群に投じ』るようなことになったのか」についてだが、新井氏の言われるように《北野》はもともと役者を志して上京してきたということしか現段階では言えそうもない。これはあくまで参考程度にしかならぬが《北野》の生まれ育った時代性といったものを少々考えてみたい。《北野》の誕生した明治26（一八九三）年あたりから彼が成人するまでの二十年間くらいの演劇関係の出来事を左表にしてみた。

明治22年11月　歌舞伎座開場。（団菊時代の到来～36年まで）
明治24年6月　川上音二郎「書生芝居」一座、東京浅草鳥越座で旗揚げ。
「板垣君遭難実記」その他を上演して大評判となる。
明治25年5月　皇后陛下川上一座の演技をご覧になる。
川上一座、歌舞伎座に進出。
各地の民謡東京で大いにうたわれ流行と化す。
娘義太夫さかんとなる。
真砂座主その他の発起で俳優学校設立が決まる。（明治34・3・6　読売）
坪内逍遥・島村抱月ら早稲田派の文芸協会が創立。
帝劇女優養成所に、元代議士の令嬢森律子入所。
文芸協会、演劇研究所を開設して素人からの男女俳優養成に乗り出した。
島村抱月・松井須磨子らの芸術座、創立され、第一回公演メーテルリンク『モンナ・ヴァンナ』を有楽座で上演。
近代劇協会『ファウスト』を上演。
芸術座、帝国劇場にて『復活』を上演、松井須磨子のカチューシャの唄評判となる。

明治28年
同年
明治34年
明治39年
明治41年
明治42年
大正2年9月
同年
大正3年3月

これら世相の流れからおぼろげながらも言えることは《北野》の生まれ育った時代というのは、和洋とりまぜて日本近代「演劇」の幕開け～興隆期に重なっているということだ。北陸福井に生まれ育った《北野》ではあったが、地方とはいっても福井は旧都・京都とは隣どうしの地理的関係にあり比較的流行などの情報が入りやすかっただろう。またジャーナリズム界に身を置く従兄たちの影響といったこともじゅうぶん考えられる。武家の出身、しかも歴史的人物吉田東篁の子孫であるというプライドはもちろん彼にあったろうが、帝劇女優養成所に元代議士の令嬢森律子が入所した時代でもある。青年《北野》の俳優への志は時代の風にある程度乗じたものと考えてもよいのではあるまいか。

後日、北野晃氏《北野博美／広瀬千香長男大正8年3月4日生まれ》から示唆を受けて『秋田雨雀日記』第一巻（尾崎宏次編　昭和40　未来社）を繙いた。日記中に《北野》の名前を散見するというのだ。最初に《北野》

の名前を認めるのは一九一五（大正4）年二月二十日の項である。

一日室の掃除をつづけた。押入れの中から死んだ藤堂清子の書信が出てくる。なにかセンチメンタルな気持になった。晩、佐藤、倉若、北野君らと入浴。浴後、藤堂の手紙をよむ。藤堂清子は女子大にいたが、文才のある人だった。森田たま、北川千代子の友だち。

この当時の秋田の住所は「東京府北豊島郡高田町大字雑司ヶ谷町二十二番地」である。（『秋田雨雀日記』Ⅴ「年譜」より）《北野博美》と雨雀との出会いはたまたま近隣に住まっていたことにあるという。（註7）（これにより多少後の記録となるが、大正七年四月の時点で北野の住所は「市内小石川區雑司ケ谷五二」（『變態心理』大正七・七）《北野》がこれまた近隣に住んでいた心理学者の田中王堂や菅原教造らと知り合いになった時期もこの頃らしい。（註8）このあとも一年に一回程度《北野》は秋田雨雀の日記に顔を出している。しばらく『雨雀日記』から《北野博美》の姿を追ってみよう。

大正4・2・28　晩バアで佐藤君、倉若君、北野君と飲む。

大正5・1・31　実業世界へゆき、北野君、安成君にあい、原稿料八円をもらい（後略）

大正6・1・29　カフエ・ウーロンには小林君と北野君がいた。三人で共益社のピアノをきき、パウリスタへ行き、それから花柳を呼んで富田君なぞといっしょにウーロンで茶を飲んだ。

大正6・2・1　帰りに北野君のところへ寄る。一時間ばかり雑談した。

坂本篤は「『国貞』裁判・始末」（昭和54三一書房）の中で「…甲府に早稲田の学生芝居が興業にいったとき、座長に彼女がほれちゃった。ところが、そこに北野博美といって、のちに『性研究』という雑誌を出していた男がのり込んでいって、取っちゃった。」と「高崎年譜」第四項「たまたま一夜甲府市に一座興業、市の富家の令嬢と相愛」の件をこう説明する。どうやら北野の上京の時期は広瀬千加との結婚に伴う大正五年のそれより以前のことであったようだ。大正四年の二月下旬には秋田雨雀や佐藤誠也らと入浴をともにするくらい昵懇となっていることからも、《北野》の上京はおそらく大正四年以前のことと推察される。おそらく《北野》は夢の実現のため？同世代の若者たち、「早稲田の学生芝居」の連中や駆け出しの役者だった佐藤誠也（芸名・青夜）などと交流を深め、彼らとともに芸術座～美術劇場～第二次新時代劇協会と当時の演劇界で華々しい活躍をしていた秋田雨雀の家へ出入りするようになったのだろう。秋田雨雀の（演劇はもとより）ロシア文学・北欧、ロシア、東洋の神秘思想・社会主義など幅広い分野への興味関心は《北野》の蒙を啓き、その後の彼の方向性を示唆したと思われる。役者から性研究者への進路変更はいかにも唐突のように思えるが、雨雀よりの影響ということを考えると案外納得のいくものとはなるまいか。（《北野》の福井

新聞退社の時期や故郷福井出奔の時期が明確でない現在言い得ることはこの程度のことでしかない。《北野》がいつどうやって秋田雨雀と知り合いになったのか、上京後どうやって生計を立てていたのかなどといった具体的なことは今ひとつ明確でない。大正5・1・31日付『雨雀日記』から《北野》が当時「実業世界」という出版社で仕事をしていたらしいことが窺える。新聞記者時代に培った経験を上京後も活かして編集の仕事についていたのだろう。《北野》と名を連ねている「安成君」とは後年「近代思想」「へちまの花」「生活と芸術」などに生活派の短歌を発表し歌人として名をなすことになる安成二郎（明治二一・九・一九―昭和四九・四・三〇）のことと思われる。安成は大正三年「実業之世界」記者となり、のちに編集長まで務めた。（註9）

補記

過日、拙稿（註10）で報告した内容と重複するが北野文次郎（博美の本名）著「それが事實なら」（帝國聯合青年會発行『斯論』第一巻第六号　大正六年十月掲載）は「今年二十五歳になる」主人公「彼」が半生を振り返るというスタイルをとった「創作」だ。これには《北野》自身の姿が投影されているものと思われる。いくつか場面を拾ってここに紹介したい。

○「十七歳の秋」「彼の一家は思はぬ失敗に遭遇して彼等三人はその日の生活にさへ苦しまなければならぬ境遇に陥った」「止むなく彼は彼等を助くべく土地の新聞社に入つた」

○「二十二歳の春」「彼にとつては誰れにも代えがたいと思ふほど愛して居た母が僅か十日許りの病きで亡くなつた」「母の靈前に供へてあつた香奠の金を掴んで走つた」「かくて彼はその年の夏の初め不義の借財と一人の父を残して瓢然故郷を去つたのであつた」

○「彼はその年（二十二歳）の暮も押詰まつた三十一日、東京にある友を頼つてそのおちぶれた姿を目白の停車場に酒した」

○「彼か（ママ）東京で或る雑誌社に職を求め得たのは翌年の四月であつた」

それぞれの年齢を数え年のこととして換算すると「土地の新聞社に入った」「十七歳」＝明治42年、出奔・上京の「二十二歳」＝大正3年、「東京で或る雑誌社に職を求め得た」「翌年」とは大正4年のこととなる。創作という形態をとっている以上慎重を期さねばならぬ点もあろうが、高崎正秀の「北野博美年譜その他」「北野博美大人と『年中行事』のことゞも」（臨川書店『年中行事』内容見本　昭和47）の叙述や『秋田雨雀日記』の記述などと併せて考えてみると合致する点も多く見られ、《北野》の自伝としてかなり有力な裏付け資料と見なしてもよかろう（北野と雑誌『斯論』及び帝國聯合青年會との関係性などは未詳。）

註

1　「民俗学に寄与したひとびと」「日本民俗学大系7」平凡社　昭和34

2　拙稿「裏方のひと―北野博美と折口信夫」、「裏方のひと―北野博美伝」（①～③）参照のこと。

3　田中純一郎は『日本映画史発掘』（冬樹社　昭和55）の中で北野との出会いについて以下のように語っている。「（大正八年のスペイン風邪の）病後の静養に、群馬の山の中の温泉で三ヵ月ほど暮らしていた時、旧友の温泉宿の伜が、いま東京の珍らしい心理学者が別館に逗留しているから逢ってみないか、というので、いっしょに行ってみる

と、その頃ベストセラーになったハヴロック・エリスの性心理学の紹介で知られた北野博美氏です。数回お目にかかっているうちに親しくなり、勢い北野氏の発行している「性之研究」という雑誌の編集を手伝うことになった。私はここで漸く念願だった雑誌編集の技術や、原稿を書くことなどを教わったのです。まこと、人生は出合いにあるとは、よく言ったものです。／しかもその研究所で、変態心理学の第一人者中村古峡氏や、民俗研究家南方熊楠氏、江戸文学研究の三田村鳶魚氏、劇作家秋田雨雀氏、詩人辻潤氏らをはじめ、お茶の水女子大学教授菅原教造氏、それに、さっき話した東京外国語学校仏文科教授星野辰男氏らの知遇を得ました。殊に菅原先生や星野先生は文部省映画調査委員をされていたので、映画界内部の消息などをくわしくお聞きすることができ、私は急に大人になったようで、専門学校や大学以上によい勉強になりました。」

4 「性之研究」編輯兼發行人北野「千加」とは一文字違いである。雑誌の中でも千加・千香と混用されている。坂本篤が昭和37年に編集・刊行した「はだかの昌三　以茂随流　終刊之巻」（有光書房）に掲載されたエッセイにも「広瀬千香」の名前は二回登場する。本川桂川「昌三艶話一昌三と私」豊仲鍬之助「政三・昌三・少雨荘」

5 該当者なし。北野晃氏に伺ったところ、広瀬千加の父親はその名を慶次郎といい母親は久といったそうだ。

6 千加が本名。千香、つゆ香は筆者。

7 北野晃氏談。

8 「大塚の高台、巣鴨の宮仲に私は住んでゐたが（大正五年）、隣家は遠藤清子さん（もと岩野泡鳴夫人）のお宅（以下略）。田中王堂や松本雲舟…此人は同じ宮仲に住んでゐた。清子さん宅へよく来られたので、其処で私は知己となつた。」広瀬千香『思ひ出雑多帖』（一〇五ページ）

9 「著者略伝」『花万孕』昭和47　同成社　「民俗芸術」（第一巻第六号　昭和三年六月　七六ページ）掲載の「秋田縣大館で聞いた方言五言律詩」の筆者・安成三郎は安成次郎の変名か。

10 「裏方のひと―北野博美伝③」『若越郷土研究』（42の4）